

神石郡遺族会

神石郡遺族会概況

神石郡は広島県の東北部に位し岡山県に接して、油木町、神石町、豊松村、三和町の一村三町よりなり、総面積の八割以上が山林で、耕地は田畠相半ばしている。耕作に人力を要する事多く働き盛りの男労働力を今大戦で一四六五名も国に捧げて、神石郡の特産たる、神石牛、こんにゃく、煙草の生産に非常な支障を及ぼしていた。農山村の労働力がみな婦人に掛る、いづれの所も同じながら、わけて神石郡の婦人は戦中にも増して戦争未亡人を助け婦人会活動に精励した、占領下の厳しい指令も五ヶ年の歳月が流れ、慰霊祭も民主団体が率先して各村で行われた。神石郡は十一町村早くより連合して慰霊祭を行って来た。昭和二十四年九月八日第一回を、昭和二十五年八月十六日小島村公民館で神石郡第三回慰霊祭が神仏両式に依って挙行、川上富恵（豊松村会長）の開会に始まり神宮僧侶三十余名の荘厳なる追悼会に移り、連合会長村上濱治郎（油木町会長）の祭文は英霊に感謝し、遺族の厚生状態に及び今後の進むべき方針などを御霊に誓い遺族を力づけ、地方事務所長等の来賓、個人の資格に於いて多数参列、誠に盛会裡に終り副会長福場猪十（小島会長）閉会の挨拶にて、英霊の偉大なる犠牲に報いるに政府は遺族援護に全力を尽くすべきことを説き、遺族一同涙を新にして閉会した。神石郡来見村の婦人会では戦死者の慰霊祭は遺族会のみが行うべきではない。国の

為に尊い生命を捧げられたのだから、国が、国民全体が行うべきである
と来見村各種団体に呼び掛け協議の結果、婦人会主催のもと村全体の協賛で八月二十九日来見村の公民館で百六柱の英霊を迎えて神仏両式で執行され、主催者佐武婦人会長の式辞三米にも余る長文を音吐朗々と英霊の武勲を讃え、戦後の疲弊困憊せる悲惨なる社会の現況にも負けずよく家政を支え、老父母を助け遺児の養育に専念して英霊の意思に報いんと女の細腕で頑張っておられる有様を熱涙をこめて語り国も国民も一つ心になり平和と日本再建設の基礎として先づ戦争未亡人の更正刷新に支援と協力をと懇願せられ、満堂肅として声涙俱に下る有様に村上連合会長之に對し感激の謝辞をのべられ、意義深く慰霊祭を終る。さすが神石郡、女流県議を早く送出しただけあって、婦人の文化程度高く、自力更正、古里創生、農山村の刷新に社会活動に婦人団体の先導的働きが強い。佐武タダ婦人会長の感深い弔辞は今に語られている。

■神石郡の遺族会

神石郡は、油木町、小野村、新坂村、豊松村、仙養村、高蓋村、牧村、高光村、永野村、小島村、来見村の一町十ヶ村からなつてこの各町村がそれぞれ遺族会を結成して、昭和二十四年には十一村合同で慰霊祭を行っていた。昭和二十八年県下に先がけて町村合併促進法の施行により、相次いで合併。

神石町	牧村	一九六柱、高光村	八五柱、永渡村	一二六柱
三和町	来見村	一〇六柱、小島村	一六五柱、高蓋村	一七五柱
小計				四〇八柱
小計				四四二柱

油木町 油木町 一八七柱、小野村 四五柱、新坂村 八二柱

豊松村 二一〇柱 小計 四一五柱

合計 一四七四柱

○合併後の神石郡内の初代遺族会長、婦人部長、青壮年部長

神石町 佐々井 勇、三好ハツミ、滝口 敏
三和町 田原 一、小林イサノ、若林 哲吉
油木町 村上濱治郎、伊藤 翠、石原 轟
豊松村 川上 富恵、有本 梅代、井原 晴繁

■神石郡遺族会歴代会長

初代 村上濱治郎（油木町）、二代 福場 猪十（三和町）
三代 川上 富恵（豊松村）、四代 佐々井 勇（神石町）
五代 田辺 軍事（神石町）、六代 立石 治郎（三和町）

■英霊の顕彰、遺族の献花で祭壇燦とす

町村統合後は町村の主催で慰霊式が行なわれている。四町が連合で会場町の町長が委員長となり順番に会場を受持つて遺族をバスで案内する。式典は町長代表の委員長の式辞につづいて郡遺族会長の慰霊の辞があり県知事外来賓の追悼の辞、献花につづいて全遺族の献花礼拝が行われる。各遺族が献花される小菊は各英霊が生前めでたであるう自家前庭の家伝の小菊、次々と祭壇を菊花が飾られて祭壇燦然として武勲を称えるの感、神石郡の慰霊式の伝統的特色として、深い心の結ばれた式典が行われている。終戦五十周年記念の式典は豊松村が当番で計画中である。

■神石郡遺族会役職員表

会長 立石 治郎（三和町） 事務局長 山本 博之（町福祉課長）
婦人部長 木津和三矢子（三和町） 中川 安子（社教主事）
青年部長 滝口 敏（神石町）

■神石郡遺族会現況諸調査（平成六年十月調）

町名	英霊柱数	遺族数	婦人数	青年部数	受給者 会費	一般 会費	忠魂碑	慰霊碑	護国社	氏神社 合併
神石町	四	三	六	八	三、〇〇〇	一、〇〇〇	二			一
三和町	四	三	六	九	三、〇〇〇	一、〇〇〇	一	一		一
油木町	四	三	五	七	一、〇〇〇	三〇〇	一	二		一
豊松町	三	三	三	五	一、〇〇〇	一、〇〇〇			二	一
計							四	三	二	四

終戦五十年を迎えて

神石郡 滝口 敏

昭和二十年復員して父の戦死を知る。六人兄弟の長男として母と祖父の八人家族の責任者としての生活が始まった。

国民すべてが食べる事に全力を費した時代から、世界の先端技術のもとに製造し消費、そして輸出へとすばらしい発展があった事は事実である。

過ぎし時代を振り返ると、当時は我が家だけがこんな痛手を受けたの

百年の歴史ある神石郡立護国神社

神石郡立護国神社



忠魂碑前の慰霊祭
忠魂碑移転改修記念
(H48. 8. 14)

伝統の神石郡追悼式



だろうか、戦争さえなかったら、父親が生存していたらと、戦争の残した傷の大きさを事有る毎に感じながら過ごしたのであるが、すでに半世紀、今はなつかしい思い出としての感さえあるこの頃である。

「去るものは日に疎し」これが人間というものである。平和を口にしながら思想の違いから内外共に混沌とした中にあるのが現在である。

国歌のたどる道は何か、人間の目ざすものは何なのか、広く、深く考える時と思う。過去の反省に立って二度と過ちのない世代の続く事を願うのである。

衣食の豊富な社会生活に感謝し、心の豊かな人間である事を誇りに出来るのが靖国の遺児であり文化人である。お互に真実の追求に努力を続けよう。